漢法苞徳塾資料	No. 516
区分	診断
タイトル	各種弁別表
著者	八木素萌
作成日	

I. 補瀉の選択表

1 『靈枢』根結第5

1992.11.20 八木素萌

	形気の虚実	病気の虚実	施術の補瀉
A	有余 (実)	有余(大過)実	急ぎ之を瀉してのち其の虚実を調べよ
B	有余 (実)	不足(不及)虚	急ぎ之を補せ
C	不足 (虚)	有余(大過)実	急ぎ之を瀉せ
D	不足 (虚)	不足(不及)虚	不可刺 [甘薬もしくは気海に灸]

- (1) 汪機 『鍼灸問対』の解説的な記述を参考にして作表した。
- (2) 形気の有余・不足については、形＝筋骨、気＝心肺機能が有余であるか、反対に不足しているかということ。
- (3) Aの「之を瀉す」とは病邪を瀉す。「其の虚実」とは経脈・蔵府に見られる所と解釈する。
- (4) Bは筋骨も心肺機能も「実」であって、病邪に侵されにくいのに病んだのである。故に「補」のみで治癒するということである。
- (5) 病気の有余≡大過≡実は『難経』9難・15難などに記述されているように、「外感病」である。故に、これを瀉すことによって、体調が回復するのである。
- (6) 病気の不足≡不及≡虚は「内傷病」であると『難経』に記述されている。故に七情の様相と五蔵の虚実の関係によって、Bの「補」の内容が決定されることになる。
- (7) Cには「補」が記述されていない。この場合は病邪を瀉せば体調が回復していくことになる。

2 元・李東垣『李杲十書』の補瀉選択

	形気の虚实	病気の虚实	施術の補瀉
a		有余(邪気勝)	瀉(寒涼酸苦剂)
b		不足(真気不足)	補(辛甘温熱剂)
c	陰陽俱不足		補(甘薬・禁鍼・気海灸)

- (1) 補瀉は病勢によって決める。
- (2) 形気の有余不足は補瀉を決める第1条件ではない。それ故に、a・b欄が空欄。
- (3) 主たる病症を見極め、瀉法を用いて病を追い出すのが基本。
- (4) 四季に基づく治法を行う。

2. 外感病と内傷病の診別要点表

1997.11.24 八木素萌

	外感病	内傷病
症状	明瞭で、病状の変化が激しい	不明瞭曖昧で、病状の変化も緩慢
手	手の甲(手背)に熱を帯びる	手掌に熱を帯びる
	関上の脈が 左>右 となる	関上の脈が 左<右 となる
腹部	腹部に張りがある 腹直筋の緊張がない むしろ胸脇苦満、 心下満や心下痞硬がある	腹部が全体的に虚軟であるか、 腹直筋の異常な緊張がある 少腹は虚冷である
寒熱	熱が出ても発汗しにくい	無熱か微熱で悪風し自汗する、 または、かすかな悪寒か悪熱して 自汗がある
皮膚	充実して弾力があり、さらりと しており、温度にムラがない	脆弱で薄く、何時も湿り気味な 感じであるか、乾燥している
臍傍	臍輪が明瞭 弾力がある しっかりしている	臍輪は不明瞭・不定形 弾力にムラがある 張りに乏しい
	臍の周辺に動悸がない 臍索は観察されない	臍の周辺に動悸があることが多く 緊張度が高い 臍索が遊離していることが多く、 時に痙着している
八虚反応	募穴・気会・腑会との反応が 見合っている	背腧穴・血会・臓会との反応が 見合っている

☆時邪の処理は治療上一義的に重要である。

◎外感病（陽証）の治療

- 1) 外邪の五行と変動経の判定
- 2) 外邪の瀉法が主
- 3) 陰陽の変動（三陰三陽）は六経に転換して探索し対処する
- 4) 主治経は病臓の陽経
- 5) 病因の五行に応ずる陽経の五俞穴
- 6) 病因が指示する募穴を瀉す
- 7) 「表虚」（傷寒・温病とも）必ず保津処置を行う

◎内傷病（陰証）の治療

- 1) 病臓・病理的産生物・微弱外邪の判定
- 2) 病臓の「補」・病理的産生物（痰・飲・瘀）の処理・微弱外邪の瀉（間接）
- 3) 病臓（陰経）の「母経の自穴」「経穴（冷え）」「俞穴（労）」「絡穴（燥）」
「背腧穴」の補
- 4) 微弱外邪の瀉（間接法）
病因の五行に応じている経の剋経を用いる。剋経の自穴・自経の剋穴などの補
- 5) 「痰」「飲」「瘀」が塞いでいる経（部位）を探索して疎通させる。
- 6) 浮絡・細絡は除く（表裏・上下・剛柔などの経の相互関係を察して探索）。

その他の諸関係の考察から……

Ⅲ. 虚実辨別表(病)

	虚	実
現病症の 症状	曖昧緩慢で、色・脈・形などの表象に おいても同様である	患部や病態などが明確急峻である
罹病時期 の自覚	曖昧で何時罹患したのかの 自覚に乏しい	何時罹患したのかに関する 自覚が明白
症状の変化や推移	変化が曖昧で推移も緩慢	病状の推移や変化が急峻で 自他ともに明確
音声	発語の力が弱く声もカスレ気味	語言が力強く 音声にも力あり明瞭である
汗	何時も自汗気味で肌がサッパリしな いか、盗汗する 所謂ジトベタ肌	熱があっても発汗しにくいし、 玉の汗をかいても乾くとサッパリ肌
呼吸	少気：浅く短く弱い	短気：粗く喘ぐ呼吸

註：鍼灸治療においては、鍼法における補瀉の選択は、極めて重要な問題である。補瀉選択の根拠は、『難経』81 難に記述されているように、「脈診の判断」によって補瀉の選択を行うと誤りが生じやすいので、病そのものの虚実判断に従うべきである。そこで、『内经』『难経』『伤寒論』に記述されているものから、一般的と思われるものを選んで意識作表した。

IV. 虚実辨証表

分類	脈象	舌苔	主要症状	治則	
虚証	力なし	少ないか、ない	顔色は蒼白く、呼吸は浅く短く、体力が萎えて、語少なく、小さく、微か、腹は虚軟で按ずるを喜び、如何にも倦怠無力である。	補虚	
実証	力あり	厚く、膩である	顔色は赤く、呼吸は荒い、煩燥して譫語し、腹は痞硬脹満して按ずることを拒む	清裏	
虚証	気虚	濡弱	舌質は淡色で苔は薄い	声は力なく、低く、微かで、自汗があり、心悸し征忡する。(心臓が躍り、憂鬱、疲労、衰弱等を訴える症状のこと)。頭暈し耳鳴りする。食少なく疲労倦怠を訴え、語も如何にも億劫の様子で、呼吸も弱々しい。	益気
	血虚	細で無力 又は細澹	苔は少ないか、無いかで、舌質は淡色	夜、熱が出て盗汗し、唇の色淡く、毛髪は萎枯し、皮膚も枯澹する。心煩して、眠りが少ない。	養血
実証	気実	沈実有力	黄や黄褐色で厚い	胸は痞えて満悶し、痰多く喘満し、口臭して吞酸し、大便は秘結する。	通裏
	血実	沈弦	舌質は紅いか、又は紫斑を帯びる	邪が肌肉にある時は、必ず局所が青く腫れて、疼痛がある。 邪が裏にある時は、癥瘕や積聚を生じ、痛みがあつてそれは移動しない。 邪が経絡にある時は、筋の攣急と身痛がある。 邪が上焦にある時は、胸膈部に刺痛がある。 邪が中焦にある時は、腹部で不快な痛みが走る。 邪が下焦にある時は、少腹が腫脹腫満し、刺痛がある。大便は自利で色は漆のように黒い。固定痛(放散痛はあるが)	消瘀

V. 六経辨証表

分類		脈象	舌苔	主要症状	治療法則	
太陽病	経証	表虚	浮緩	薄白	汗して悪風する。	榮衛を調和する
		表実	浮緊	薄白	悪寒、無汗	発汗して解表する
		表熱	浮数	薄白或いは淡黄色で舌質は紅	発熱あり、悪寒はないか、微かである。頭痛し、又は口渴する。	清熱解表 (熱を下げ、解表する)
	腑証	蓄水	浮数	白滑	頭痛し、発熱し、悪寒あって煩燥する、口渴して飲み物を欲し、水が入ると吐く、小便は不利である。	化氣行水、兼・解表
畜血		沈瀦有力	舌に紫点がある	少腹の急結(ヒキツレ、シコリ、膨隆)、発熱、頭痛、狂の如くであったり、発狂したり、小便は自利である。	行瘀、破結 蕩滌邪熱	
陽明病	経証	洪大浮滑	舌赤く苔黄	大熱し、大汗し、大渴する。	清熱	
	腑証	沈実滑数 (洪もありえる)	苔燥き 或いは芒刺を生ず	潮熱し、譫語する。便秘し、腹は脹満する。そして腹を按ずるを拒む。	攻下	
少陽病		(病的な)弦	白滑或いは淡黄色	往来寒熱する。胸脇苦満し、口苦く、咽乾く。心煩して嘔する(空えずきする)、食思なし。	表裏の和解	
太陰病		沈弱或いは濡弱	白滑で膩(舌質も)	腹満して時に痛みあり。腹瀉し、食思不良、不味、嘔吐するあり	温中健脾	
少陰病	虚寒証	沈微細	白滑(舌質も)	寒気があって、身体は倦怠感あり。口中は問題なく手足は厥冷し、消化不良性下痢や食事の都度の軟便状下痢あり。横に臥していたい。	回陽救逆	
	虚熱証	細数	紅絳色の舌質	手足も身体も虚熱あり、口は燥き、咽も乾く。心煩して眠れない。	滋陰清熱	
厥陰病		弦数 或いは弦緊	淡黄(舌質も)	消耗感強くて渴する(消渴)。逆気して心を撞く(衝心)。心中が痛み、熱感がある(上熱の時)。飢えを感じているのに食することが出来ず、食すれば吐衄する(下寒)。	温清併用	

VI. 衛気榮血辨証表

分類	病位	病機	鑑別要点		主要症状	治則
			脈象	舌苔		
衛	皮表部 気道 頭部	温邪が表を犯し、肺衛の働きが失調(失宣)	浮、数	白苔 或いは 薄白	微に悪風感するも熱が主であり、微に渴する。(口渴又は不渴)、頭痛し、身痛し、自汗す。無汗の時もある。	發表透邪
気	肺、胃 腸、胆 脾	肺衛に熱が蘊滞、腸管に熱が滞結。	洪大滑数 洪大滑実	黄苔	発熱し、悪熱する。悪寒することはなく、口渴し、便秘し、発汗し、呼吸荒く、譫語し、小便は色濃くなり、量が減る。	清熱保津 又は 撤熱存陰
榮	内臓 津液 損耗	営陰が高熱であぶられ、心神が擾れを蒙る	数或いは 細にして 弱	舌質が 紅絳色	意識は障害され、譫語する。舌はロレッツがおかしくなり、足は厥冷する。熱が高いのに、口はかえって渴しない。煩燥して寝られない。又は斑疹がでる。	清営透熱 又は 清心開竅
血	内臓 (心、肝、 腎)	熱が血に逼って、その為に心神が擾乱する	虚、 弱数、細 或いは促	舌質が 深絳 光絳 紫晦色	斑疹が広く露われる。(透露) 衄血をしたり、二便に出血を見る。又は意識障害を伴って瘧瘵する。	涼血散血 養血定風

VII. 三焦辨証表

分類	所属	病機	鑑別要点		主要症状	治則	
			脈象	舌苔			
上焦	肺	肺が肺衛を襲って、その為、肺の肃降作用が失調、又は熱が肺の作用が壅いでそれが閉ざされ郁した。	浮 又は 浮数	白苔 黄苔	発熱し、微悪寒、頭痛 微に渴し、自汗し、時に咳する、又は身熱あって、悪寒せず、発汗して口渴す。咳嗽し、气喘する。	清邪宣透	疏表宣肺 清解肺熱 便邪外出
	心包	熱が心包に陥入して、心包機能が内に閉塞した。	数	舌質が紅絳色	意識障害と譫語、肢厥冷、又は傾眠状態となって不語となる。舌はロレッツがあやしい。		芳香開竅 清熱解毒
中焦	胃	胃熱が強くなってきて、正邪の抗事が起こっている、又は腸に熱がこもって通行不良を来した。	洪数 又は 沈実	黄燥の苔 又は 黄黒焦燥の苔	発熱し、悪熱し、悪寒することはない。発汗し、口渴し、呼吸は粗い。又は潮熱し、便秘し、尿も濇る。	清涼透泄 宣化滲透	瀉熱保津 又は 咸寒瀉下
	脾	脾の湿気の作用が、鬱結して湿熱が閉塞、鬱滞した。	濡	厚く膩の苔	熱はあるがあまり高くはない。然し午後には熱が上がり、悪熱で悪心があって吐きたい。胸膈に痞えを感じ、悶煩する。身体は重く、手足はだるい(身重肢倦)。		清熱化湿
下焦	肝	腎水の働きが温邪の熱の為に乾いて肝を潤さなくなつて肝旺の為に虚風が内動した。	弦細数	苔は少なく舌質が絳色	熱が深くなり力の衰えも甚だしく、その為に心は澹澹として大動し、手足が惕動する(ピクピクと動く)。甚だしい時は瘧厥を起こすことになる。	潜鎮滋養	滋腎養肝 熄風
	腎	熱が腎水を灼つて、腎の陰精が竭きようとしている。	虚 又は 細数	同上	身体は虚熱でホテリ、顔は赤くなり、唇は裂け舌は燥き、足底や手掌もホテリ、夜は不安で眠られず、情緒的にも気分が物憂く、気怠い。(神倦)反応も鈍い。		養血滋陰

以上は、劉冠暈「脈診」中の表を訳したものである。

1988.12.10 八木素萌

VIII. 表裏辨証表

分類	脈象	舌苔	主要症状	治則
表証	浮	白薄	発熱、悪寒、頭痛、四肢倦怠、鼻塞	解表
裏証	沈	黄、灰色	壮熱、潮熱、意識障害、煩燥、口渴 便秘又は下痢、胸の疼痛や腹痛、尿は濃い色	裏の熱をさます (清裏)
半表半裏証	弦	淡黄色 又は 苔は膩となる	往来寒熱、胸脇苦満、心煩喜嘔、口苦 咽乾、目眩暈、飲食を欲しない(食思不振)。	表裏を和解す (和解表裏)

表	寒	浮緊	白薄潤	発熱、悪寒、無汗	辛温解表
	熱	浮数	舌尖紅く 苔は白薄	発熱、悪寒、骨節の煩疼 有汗又は無汗	辛涼解表
	虚	浮緩 無力	舌質は淡	汗出て悪風、又は汗が止まらない	調和榮衛
	実	浮で有力 或いは浮緊	白薄	発熱、悪寒、無汗、身体痛	辛温発散

裏	寒	沈遅	質は淡白苔	畏寒し、四肢冷たく、渴せず悪心し 嘔吐す。腹痛し、大便は稀溏であり、 又は、瀉痢し、小便は澄明で力なく長い	温中祛寒
	熱	沈数	舌質は紅く 苔は黄色	発熱し、口は乾き渴する。煩熱して、 擾乱し、小便は色濃くなる。	清熱瀉火
	虚	沈弱 又は 力ない	舌質は肥腫して然も張りが ない、 舌苔は白い	呼吸は弱く言葉はものうい。食は減退 し、倦怠であり、泄瀉したり、遺精し たり、或いは二便を失禁したりする。	温裏補虚
	実	沈実 又は有力	舌質はくすんで青味を帯び 苔は黄色	煩燥し、譫語し、発狂する。腹は脹満 し大便は秘結する。	攻下清裏

IX. 寒熱辨証表

分類		病機	脈象	舌苔	主要症状	治則
寒証	実寒	寒邪壅盛	沈伏 或いは 弦緊	白膩苔	悪寒、肢冷、腹冷痛	温通寒凝
	虚寒	陽気虚衰	遅細 又は 微弱	舌色は淡く肥 胖し苔は薄く 潤う	悪寒、四肢は厥逆、顔色は白く、消化不良性の下痢、尿は清澄で長くかかる。	温陽扶正
熱証	実熱	熱邪熾盛	洪数 又は 滑実	舌色紅く 苔は黄	壮熱となり、煩燥し、意識は爽でなく(神昏)、譫語する。腹は脹満して按ずるを拒む。	清熱瀉火
	虚熱	陰液虧耗	細微 無力	舌は紅く 苔は少ない	潮熱、盗汗、ゲッソリとなって力ない様を呈す。五心煩熱し、口は乾き、咽も燥く。	養陰清熱
真寒仮熱		陰が内に実して虚陽が浮越したものの	細微でまさに絶えんとしている。 又は洪大にして無力	淡い黄色で潤いがある。 又は灰色の苔で潤っている。	口渇するも冷飲は喜ばない。飲食は少ない。身熱があるのに反って着衣を欲し、手足は躁擾するのに意識状態は静かである。言語はとりとめもなくして声は微である。	回陽救逆
真熱仮寒		熱が裏に鬱して陽気は外達できなくなっている。	洪数で有力 又は滑実で有力	舌質は紅で苔は黄色く膩である。	身体は寒気があるのに着衣は欲しない。四肢は冷たいが熱があつて、齒は乾き焦げている如く、泄瀉してガスは極めて臭い。	通裏瀉熱